

糸数雄介さん

1924(大正13)年4月1日生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍 歩兵

第24師団歩兵第32連隊

最終階級 上等兵

沖縄



●1944(昭和19)年10月15日 歩兵第32連隊に現役入営、徴兵検査は甲種合格だった。

●1945(昭和20)年4月1日 米軍沖縄に上陸

米軍の船がたくさんやってきても、誰も壕に入ろうとしない。じめじめしているから嫌がった。ある日敵の巡洋艦が何かきて、照屋の部落を一斉射撃した。終わると部落は無くなってしまった。それからみんな壕に入るようになった。食糧は携帯口糧を2日分貰って終わりだった。あとは自分で探すよりない。

●あるとき将校斥候を言いつけられた。「命令を達する。山部隊(第24師団)前線の敵機動部隊の戦車の集結地を探れ」。「俺の人生はこれで終わった」と思い、頭のとっぺんから胸をじっと締め付けられるような気がした。

そして145高地に行ってみると、防衛隊か何かの人がタコ壺を掘っているのに出会った。それを指揮していた将校らしき人は、読谷の飛行場に勤務していたが、飛行場が十・十空襲でやられて補給もないので、戦車に体当たりする部隊を指揮することになったそうで、「俺の人生は7キロだ」と言っていた。「7キロとは何か?」と尋ねると、「急造爆雷の重さだ」と答えた。「かわいそうな気がするなあ、死ぬのは俺ばかりではないなあ」と思った。

●この任務の翌日、中隊全員で切り込みに行った。中隊全員で切り込みに行くときは死ぬのはみんな一緒に、自分には責任はない。ついていけばいいだけだから、かえって気が楽だった。

隊長が儀保の十字路で「これから中隊全員で切り込みに出かける。」と言った。500メートルくらい進んで道路の脇道まで来た。そこで番号をかけると20番で終わった。どうしたと思い、後ろにいくと、艦砲射撃でやられていた。

どんどん進んでいくと弾の数が増えてくる。もう立ってられない。匍匐前進みたいに背を低くしないとダメになった。負傷したが、衛生兵の手当てのおかげか破傷風にもならず、2週間くらいしたら治ってしまった。

●壕に3人で身を隠していた。そこに中隊一の力持ちだった上等兵が、大怪我をしてやって来た。「水がないか」と言う。普段から親切で仲のいい人だったので、水筒の水を飲ませた。たくさん水を飲むと血が止まらなくなるので「もういいでしょう」と水筒をとろうとしたが、しがみついて離さない。一緒にいたT衛生兵が「どうせ病院もないし見込みもないから、飲ませて出血死しようと思わない。飲ませ。」と言った。そのまま時間を待たないで上等兵は亡くなった。

するとTさんが「こんな馬鹿な戦があるかい。敵の陣地も調べない、地形も分からん、何も分からん所へただ切り込めと言って」と泣き始めた。すると側にいた同年兵が「戦友が死んだくらいで泣く奴があるか。俺の部落は普天間だ。俺の家族の所にも敵が入っている。生きてるか死んでるか全然分からん。今はっきりしてるのは俺1人じゃねえか。俺でも泣かないのに、お前え戦友が死んだくらいで泣いてどうするんだ。」と怒って、大喧嘩が始まった。

●米軍の死体のそばには缶詰が埋めてあった。それを食べていた。

●ある小さい壕に入っていた時に、壕の上に敵が来たので逃げようとしたら、後ろから兵隊が「一緒に行く」と言っついてきた。そして壕から出たとたん爆発。ついてきた兵隊はやられたらしい。そのまま500メートルほど逃げたら戦車に遭遇したので、別の方向に行こうとしたら戦車が2台いた。これは もう逃げられないから、近くの墓場に入って、拳銃で自殺しようと考えた。ちょうど頭を撃とうとする時、夜が明けて外が明るくなってきた。もう一度戦車を見て見ると、各坐して動けない戦車だった。米軍戦車とは何度か遭遇。火炎放射戦車の攻撃を受けたこともあった。

●終戦になった時は、悲しくもなんともなかった。1945(昭和20)年8月28日ごろ、「明日、武装解除をするので鉄砲を持ったまま国吉の台上に集合せよ」との命令がかかった。武装解除には生き残りの将兵336人が集まった。武器を持ったまま集合してもいいと言うので、アメリカの自動拳銃を持って行ったら、アメリカ兵が煙草をくれた。

その後、トラックで屋嘉の收容所まで連れていかれて、42中隊に配属され、PWと書かれた服を着せられ捕虜になった。実家のあった西原方面では、まだ戦闘が続いて立ち入れなかったのので、收容所を出てからは親族のいた百名に行った。そこにしばらくいて、平和になってから実家に戻った。(取材日:2011年2月4日)